

1. 課題名、調査地、氏名

課題名：「プカランガン」からみたジャワ系移民の生活世界

調査地：インドネシア

氏名：生方史数、Retno Kusumaningtyas、嶋村鉄也

2. 研究目的

インドネシアの農村部では、「プカランガン(Pekarangan)」や「クブン(Kebun)」と呼ばれる様々な多年生・一年生作物を取り込んだ複合的土地利用（樹園地）が発達していることが知られており、持続的で生物多様性の高い土地利用システムとして、早くから研究者の注目を集めてきた。しかし、近代化、市場経済の浸透、ヒト・モノ・カネのグローバル化の到来といった近年の途上国農村を取り巻く変化によって、樹園地のような土地利用も変容してきている。農村のこのような変化が、樹園地に代表されるような「里山的な」生態系における多様性をどのように変容させていくのかという問題は、熱帯における生物多様性の維持と生活システムの維持をめぐる重要な論点の一つである。

本研究は、インドネシア、ランブン県における樹園地の実態調査をもとに、変化の中で、住民の生存基盤と生物多様性がどのような関係にあるのか、そして今後それらはどのような方向へと向かうのかを検証した。

3. 研究の内容と成果

2008 年 2 月に、嶋村氏と Kusumaningtyas 氏がインドネシア、スマトラ島ランブン県において行った現地調査をもとに、1) 樹園地に植栽されていた植物と植栽パターンの特徴、2) 市場向け作物の普及と種数、バイオマスとの関係の 2 点について分析した。

その結果、1) 調査地における樹園地は、カカオやコーヒーの生産にある程度重点を置きつつも、比較的多様な種組成や垂直構造を保っており、これまでの各世帯における土地利用の履歴をある程度反映したものになっていること、2) 樹園地の種数は、全個体数におけるコーヒーの割合が高いほど多く、カカオの割合が高いほど少ない傾向があり、3) 世帯収入とバイオマス(D²H)との関連では、樹園地は低収入—低バイオマス、低収入—高バイオマス、高収入—中バイオマスの 3 つのグループに分けられることがわかった。

以上の結果は、市場作物の普及が、樹園地における植栽種数の単純な単一化を必ずしももたらすわけではないこと、単一化をもたらすとしても、土地の履歴や所有

者個人の多様な選好を反映しながら、漸進的なプロセスを辿っていくことを示唆している。さらにいえば、市場作物の普及によって、樹園地は、種数の多様性維持（コーヒー普及の場合）と単一化（カカオ普及の場合）の2つの経路を辿ってきているとも考えられる。

4. 成果発表の具体的な予定

本報告で用いた分析は、未だ予備的なものにとどまっている。今後は、分析を精緻化し、かつこれらの調査結果がどのような因果関係に裏打ちされているのかを明らかにしていく必要がある。特に、各世帯が生存戦略の中に、生産物の多様性を維持させるようなリスクをどう織り込んでいるのかについて検討する必要がある。これらの点について修正を加えた後で、今年度中に論文として投稿する予定である。